慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 工業化と十九世紀のフランス，ドイツ |
| Sub Title | Industrialization in the nineteenth century France and Germany |
| Author | 渡辺, 國廣 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1967 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.3 (1967. 3) ,p.312(64)- 321(73) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19670301-0064 |
| Abstract | |
| Notes | 研究ノート |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670301-0064 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

# 工業化と十九世紀のフランス、ドイツ

渡辺國廣



私はこのところ大学で、「近世経済史」を担当させられている。工場制拡充のなかで、各国はこれにどう対して来たか。講義ではそんな点の扱いに重点を置いた。以下は講義から、一部を整理したものである。註はすべて省略したが、本稿成立の事情を汲み、諒とされたい。素材は広く諸外国の概説書に求めた。私は工場制の拡充を工業化とみるが、本稿では工業化に対応すべく、フランス、ドイツの出方に触れた。

周知の如く、十九世紀の段階でフランス、ドイツは後進国であり、イギリスに追随しながら工業化を進めることになった。私はその過程を追うことにより、後進性といったものの内容を探ってみたかった。フランスでは有産階級と深く関連し、工業化が展開した。この間において政府の指導は大きな意味を持った。しかしドイツは発展の過程で外国資本に屈することになってしまった。製造部門で外国の跳梁を許す限り、大地主ユンカーは穀物輸出の利益を享受し得た。同じ工業化だが、その経過は国により違う。私は本稿でかかる点を浮彫りできればと思った。後進性という時、そこに盛込まるべき具体的内容いかんの問題は重要だが、従来まで不問に付されて来た感が深い。本稿がこうした問題への接近に多少でも役立てばと思う。

私は講義から援用し、首題に答えようとした。講義をどう進めたらいいかまったく自信がないのだが、この機会に批判でも得られればという心境である。

## 一　工業化と十九世紀フランス

十九世紀にはいりフランスもまた新しい方向への出発をめざした。しかしこのため必要な条件ときたら、まったく悲観的で、早急な環境の整備が望まれた。フランスで工業化を進めようとする時、これこそ最初に克服しなければならない難関であった。政府の強力な指導を得て、事態は急速な展開を示した。いうなれば、上からの発展である。事実フランスの工業化をみる時、その経過というものは政治過程の推移と深く関連していた。短期日に新しい関係を国中に持込もうというのだから、環境整備のため必要な措置も一段と強力ならざるを得ない。フランスでは政権の交替が繰返され、そうしたなかで近代的発展は形を与えられることになった。革命が経済過程の変革に先行するのである。

フランス革命は近代的発展に必要な条件を一挙に整備した。新秩序の確立である。その後における工業の発展を、三つの時期に分つ。第一期は、革命からナポレオンの支配が終るまでで、時期的にいうと、一七八九年から一八一五年の間。第二期だが、ブルボン治下の時代。一八一五年から一八四八年にいたる間。ルイ・フィリップの施策に注目せよ。そして最後に、第三期ということで、ナポレオン三世の時代。一八四八年から一八七〇年までの時期。以下これら三期について工業発展の経過を考えるわけだが、いいうることは、第一に、工業化が外から、上から強制されたものであること。イギリスの技術がこれを支えた。第二には、第一の点とも関連するが、資本の調達のため他からの融通ということになってしまった点。工業化が自生的でない国において、これは避けられない。そして第三に、こうした資本の下では重工業先行という事態は避けられなかったことを指摘しなければならない。全期を通じ、重工業が経済発展の支柱を形成した。

フランスでは近代的生産組織が他から移植された。問題はそれを担ったのが誰かということであろう。これに対しては、有産階級と答えざるを得ない。彼の下に蓄積された富が融通資本として機能するのである。このため必要な機関の拡充が急がれた。金融資本の成立である。その際には、国の介入が大きな梃子になっていた。フランスで工業化は強力な国家があって可能になって来る。政府は金融資本のための後楯であった。

〔ナポレオンの時代〕　第一期に、ナポレオンの時代。彼の登場にどれほどの意味を認めたらいいのか。フランスの工業発展を考える場合、彼の役割を無視できない。ナポレオンは工業化に努力した。その発展の経過は、最初のうち緩やかに、そして次第に速度を増すというのと根本的に違う。彼がめざしたのは、イギリスを圧倒できるほどの工業の開発であった。一挙に最高水準まで届き、もう一歩の前進を達成しようというのである。逡巡は許されない。工業の人工培養にナポレオンは精力を傾けた。

問題は、技術を導入するため必要な資金の準備にある。高度の体制を短期日に確立しなければならないとすれば、資本に対する要求もそれだけ大ならざるを得ない。しかし民間には蓄積が乏しかった。ナポレオンは国中の有産階級の手にある富の利用を考えた。そしてこれを、工業化に必要な資本として組織しようとしたのである。彼がフランス銀行の設立を企図した時、実にこれを狙ってのことであった。フランス銀行にナポレオンは国内の富豪の力を結集し、工業の拡充のため必要な貸付金の準備に遺漏なきを期した。あくまで彼はフランス銀行を民間の機関にとどめる。しかし現実にナポレオンはその運営と管理に強い影響力を確保していた。総裁は間もなく政府の任免ということになってしまった。

富豪が動く時、自主的というわけにはいかない。彼に自発性を求めることは無理な注文であった。富豪の手に蓄積された余力が資本

として生産に向かうよう段取りするため、どうしても国の財政支出が大きな梃子になって来る。フランス銀行はフランスの七大富豪の連合ということだが、フランス銀行の資本のうち、国の拠出分は各家平均のそれを上廻っていた事実を想起せよ。政府による資金の補助が大きな意味を持つこと明白であった。しかし政府は単にそこにとどまらない。生産に向かい直接の補助に出ることも多かった。政府は多額の補助金を出し、工業の拡充に意欲のあるところを示した。ともかく政府が先頭に立たねばならない。でなければ、何とも動きのとれない事情があった。

ナポレオンが工業の全面拡充を考えた時、政府は巨額の財政支出をよぎなくされた。彼はこれを苦にしない。歓迎さえした。甜菜糖工場についてだが、その出現に際しナポレオンの役割を無視することはできない。植民地糖の流入が断たれた時、ナポレオンは甜菜糖の国内精製を企図、そしてこのためドイツの技術に注目、その積極的な導入を考えた。一八一一年にはナポレオンにより工場の設立が命じられた。そしてこれを機に、百に及ぶ工場が出現した。いずれも政府の補助金におっていた。そして補助金の支出範囲は産業の全般に及びさえした。問題は、このため必要な財源にあろう。一体どこに求めたのか。ナポレオンは間接税によった。しかもパン、肉、塩、タバコに課す。それらはいずれも生活の必需品にほかならない。これに対する課税により政府収入のほぼなかばを得ていたとさえいわれる。驚くべきことであった。時代の進行につれ、大衆の生活が複雑になること疑いない。食生活も豊かになっていく。ナポレオンは大衆のそうした方向をうまく利用したのである。感心できない。彼の治下、弱小の民衆の生活は圧迫されることになってしまった。

こう考えて来ると、ナポレオンの下、工業化に必要な資金の出所は単に富豪に限らない。大衆の肩にも重くかかっていた。そしてまたこうしたことから、ナポレオン時代の意味は明白であろう。彼は大富豪を自己の味方に引込んだ。しかしその際に民衆の犠牲もあえて辞さなかった。当時フランス銀行は有数の発券銀行でもあったが、ナポレオンはフランス銀行の発行できる紙幣について、五〇〇フラン以下のものを認めない。額面の高い紙幣に限った。これらはもっぱら大量の取引の必要にだけ通用する。そしてこのことからもナポレオンの意図は明白であった。ナポレオンの工業化で彼が大きな役割を期待していたのは、富豪にほかならない。ブルジョワとはここでもっぱらそうした存在であった。ナポレオンは実にこれらブルジョワの階級的利益の増進を狙ったのである。これに対し労働者には仕事と賃金を恵んでやるという態度であった。あくまで彼は社会上層の側に立つ。ナポレオンの支配の続く限り、これらブルジョワは繁栄を保証された。現にその致富には著しいものがあった。

こうしたナポレオンの施策が実際どれほど効力を持ったか。この点になると、問題は別である。実際において高く評価するわけにはいかない。ナポレオンは工業化を徹底できなかった。彼が鉄鋼業の育成に寄せた関心には特別なものがある。ロレーヌの鉄工場主のバンデル家に対してだが、ナポレオンの資金援助は巨大な額に達していた。そしてナポレオンの治下、銑鉄について自給が実現できた。しかしごく少数の工場がコークス炉に移行しただけであり、大部分は燃料として薪を使用する旧段階にとどまっていた。イギリスの攪錬法はクルゾー工場で試験的に導入されただけであった。圧延工場はフランスのどこにも存在しない。鉄鋼業で進歩は一般に量的にとどまった。質的変化はどこにも見出すことができない。織維部門では、とくに織機の改良に著しいものをみることができた。そしてナポレオンが新技術の開発に寄せる熱意には容易ならぬものがあった。毛織物工業はコックリルの発明に強い刺激を受けた。綿工業でも飛躍が著しかった。しかしこれら諸工業は原料の不足から先ぼそりをよぎなくされた。麻工業に関しては、販路の喪失が大きな打撃と感じられた。ただ絹工業のみがジャカール機を得たことでヨーロッパに優位を保った。一般に軽工業だが、意外に低調である。ナポレオンの軍隊では依然として軍服をイギリスに仰がねばならない始末であった。工業化で鉄鋼部門が先行した。

〔ブルボン期〕　ナポレオンの敗北を機に、イギリス製品はフランス市場をめざし殺到した。フランスに工業を人工培養しようという時、かかる事態を排除する必要がある。破局は何としても避けなければならない。こうしたなかで第二期の政策が打出されていく。イギリス製品はフランス市場に氾濫していた。かかる事態からの脱却が肝要である。かくしてここに工業化の政策は自由な競争を否定することで始められなければならない。一体この自由の否定ということだが、問題は、ブルボン期にそれがいかなる階層の要求であったかであろう。何よりも大土地所有者の利益につながっていた。

ナポレオンの下で工業化の努力が始まった。自給が達成できた限り、鉄鋼業で彼の施策は成功であった。しかしそこでは依然として旧式の方法が利用されていた。燃料は薪であった。このため森林は鉄鋼業にとり重要な意味を持った。森林の所有者は大土地の所有者にほかならない。彼は有産者としてこの段階で、土地による収益を前面に打出した。かくしてここに、彼の利益は工業の状況と深く関連することになった。大土地の所有者が工業の保護を主張する時、背後にかかる事情が存した。森林が彼にとり十分に儲かるよう、いわばそのための工業保護であった。同じく工業の保護だが、現実には大土地所有の擁護であった。従って工業発展の第二期には大土地所有者の利益が主張されたといわざるを得ない。これに対し大商人はすべての境界を除くことに関心を向け、保護立法に反対した。しかし一八二六年には保護体制が確立し、その結果として海外貿易は狭い範囲に封じ込められてしまった。保護といっても、幼稚産業の育成と違う。旧体制と結びついた工業の温存が、ここでいう保護の内容であった。保護によって工業の新しい方向を押進めたのではない。この時期が発展の谷間といわれる理由である。有産者は土地階級として、保護ということで大きな利益を得たが、新しい発展はかえって抑制されることになってしまった。

何としても工業化である。ブルボン期にはこのため貿易否定の方向が打出された。その結果する事態は悲劇的であった。国中が高物

価に苦しんだ。都市大衆は当時ようやく力を増して来ているが、これに対し決起した。一八四八年の革命である。

〔ナポレオン三世下〕　第三期はナポレオン三世の時代。彼の登場には広い支持があった。都市の大衆は彼に低物価のための施策を期待していた。ナポレオン三世はこれに対し貿易の拡大で答えた。そのためイギリスと互恵主義に立つことも辞さない。一八六〇年に彼は対英通商条約を締結し、貿易で自由を貫徹した。しかしこれによりフランスの工業は激烈な国際競争に立向かうことになった。打撃に違いない。こうしたなかでも工業を保持しなければならないのである。そしてこれはまた国民的要請ともなっていた。彼は工業に対し巨額な信用を供与することで事態の収拾を考えた。そしてこのため必要な資金を銀行家に仰ぐことにした。

政府の融資を得た時、工業は活況を取戻した。イギリスと対決するという視点からすれば、融資の主力は繊維部門に向けらるべきである。そこでは原料調達の困難から危機が深刻化していた事情を考えれば、なおのことであった。しかし融資の額は窮状打開に役立つべく不足した。一般に軽工業ということになるが、この時期に衰退を続けた。これに対し鉄工業では事情が違う。政府の融資は効果的であった。加えてベッセマー法の開発もあり、原料面の不安は一掃された。政府は重工業で融資活動を活発に進めた。そしてこれがまた原料上の障害を克服する梃子とさえなっていた。

一般に工業発展は軽工業を中心に始まる。しかしフランスで工業化が本格化した時、重工業に重点があった。問題は一体これが何によるかであろう。原料獲得の困難ということにも問題があるわけだが、資本の性格も大いに関係するとみなければならない。繊維部門では原料供給が政治上の理由から妨害されることしばしばであった。しかしこれは単に繊維部門に限らない。フランスの鉄、石炭は近代工業の原料として完璧なものといいがたかった。原料の点からみれば、資本はいずれを選択しても大して差がない。そうしたなかで重工業が選ばれるということになると、どうしても資本の性格が大きな意味を持つことになると考えたいわけである。そしてこれと関連し、フランスでは融通資本が生産を支えていたという事実は重大であった。こうした資本にとり、利益計算が便利かどうかはかなりの問題である。利益計算が便利であるためには、生産過程が単純であることを要する。生産過程の単純なのは重工業をおいてない。このようなことがフランスで資本が重工業部門により多く投入される事情かと思われる。鉄鋼の生産量についてだが、一位のイギリスとの間には相当な開きがあった。しかしフランスの鉄工業は当時これに次ぐ力を持っていた。薪を燃料とする慣行が急速に後退するなかでフランスはこれを達成した。生産構造に、質的変化は歴然である。フランスではそれが重工業で最初に認められた。

ナポレオン三世は貿易の自由により低物価を実現し、都市の大衆に迎合した。しかし工業は助力なしに立つことのできない状況に追込まれた。これを機に政府の融資は強化された。そのための資金を銀行家によった時、彼の立つ階級基盤は明白である。彼が貿易で自由という時、工業で融資を願う声を高め、これを機会に銀行資本のための舞台を拡大しようとしたのであった。彼は工業化のため金融資本に頼った。そして彼はこれに必要な口実を貿易の自由に見出した。

## 二　十九世紀ドイツと工業の動向

ドイツでは近代的な生産組織を他から持込まなければならない。自生的というわけにはいかなかった。当然ここに国家の指導が大きな意味を持って来る。しかし当時ドイツは国民国家の体をなしていない。領邦に分裂し、同じドイツ人がそれぞれの地で、独立の国家体制を持っていた。経済的な側面についてみても、こうした政治上の不統一が反映された。同じドイツ人でありながら、領邦ごとに関税障壁を設け、他を排除するといった始末である。商品の移動は妨害された。

周知のことであろうが、近代的な生産組織を確立するため市場は重要な役割を果す。しかもそれは広い範囲を持つものでなければならない。ドイツの状況をみる時、こうした要請とかなり食違った。市場は国境によって寸断されてしまっている。ドイツの発展に国家が介在する必要があるという時、国家体制をドイツの地に確立することから始めなければならない。いわば国内の境界を廃止するという仕事である。一挙にこれを達すべく、分裂はあまりにも深刻であった。こうしたなかで、市場の広域化という必要もあり、経済的な境界を徐々に切崩し、実際的なまとまりを持つという方向で、ついには国家体制の確立までたどりつく手段が選ばれた。ドイツ関税同盟結成の過程である。それは究極において強力な統一国家の形成をめざす。いわば近代的な生産組織を他から移植するため必要な前提の構築という作業であった。一体これに対し各領邦はどういう態度を示したか。これをみることで、新しいものをめぐる利害の対立といったものを、ドイツについて考えてみたい。しかし経済統合の後に政治統一を達した時、新しい発展が順調に起こることは危ぶまれた。実際に、それをゆがめるような経済統合でしかなかった。

ドイツが工場制工業を持とうとした時、国内市場の整備に関心が向けられた。そしてこれをドイツは関税同盟の結成のなかで達成した。しかしこの過程がユンカーにより指導されたことは重大である。ユンカーは穀物に余剰を持つ者として、海外に販売市場を求めた。彼はこれを関税同盟を介し実現しようとした。彼はドイツの軽工業と引替えに、目的の達成を期した。イギリス綿製品がドイツに氾濫することになった理由である。とにかくこれを国土の末端まで搬入しなければならない。国内市場の整備はユンカーにとってもっとも願わしい事態であった。市場の整備には鉄道の敷設が肝心である。それには重工業の充実が望まれた。関税同盟でユンカーが工業と妥協した時、実にそうした事情が背後にあったのである。しかしそこで新しい方向が本格化した時、外国資本に対する依存は深まっていった。新しい発展のため必要な富はドイツでそれほど不足していたのである。

〔関税同盟〕　ドイツの統一は関税同盟の結成ということを軸に進められた。この経済的な側面の進行に際し、一体どの領邦が大き

な役割を果したか。それについては差当りプロシャの動きに注目しなければならない。統一前のドイツにおいてプロシャは最大の領邦であった。全ドイツに対し命令できるほど十分な実力を持っていた。このプロシャの動きが問題である。探ってみよう。

一八一五年以降プロシャはいわゆる旧秩序といったものを破棄した。そして自由を基調に国家の再編を考え、実行にかかった。ナポレオンの敗北はこうした動きと大いに関係がある。とくに外国貿易の面において自由が強く打出された点に注目しなければならない。実にこれはエルベ以東に強い勢力を持つユンカーの利益保全につながった。ユンカーは穀物や羊毛の輸出拡大を望んでいた。そうした目的を実現するためいかなることが必要か。重商主義的規制はもはや有害である。自由でなければならない。従ってドイツでは自由ということでユンカーの立場が擁護されたのである。ともかく農産物の輸出市場を拡大しなければならない。そのためには工場製品を大々的に輸入し、いわばそれを梃子にしようというのである。自由ということでプロシャは先進国イギリスの従属下にはいっていった。イギリスが自由ということで工業化を促進したのに対し、ドイツは自由によりかえって工業をうしなうのである。逆であった。近代的な発展はドイツで阻害された。自由によりドイツは田園化したのである。プロシャはユンカーの利益において自由を強調した。

市場の範囲が拡大すれば、工業製品の輸入は増える。ユンカーの輸出もそれだけ容易になろうというものであった。プロシャは領邦中の強国として、この関係を他にも迫った。一八一八年プロシャは自身の必要のため関税法を制定している。そして他の領邦にもこれに参加するよう求めるのであった。一八一八年関税法の骨子だが、工場製品の輸入については優遇し、なかには無税の場合もあった。平均で一〇パーセントの低率である。これに対し砂糖、コーヒーといった植民地産品の輸入には高率の関税を課し、塩などの政府専売品については輸入を禁止した。明白なことだが、工場製品の輸入は比較的自由となり、その限り工業発展は妨害されてしまった。また輸入関税は生活必要品について高く課された。いずれも輸入によるほか入手不能な品々である。しかも大衆の間でその需要は増大しつつあった。これに課税することの意味については説明を要しない。実に財政収入の確保が企図されたのであった。工場製品のための市場を開放することで農産物の輸出を容易にすること、大衆の犠牲で国家財政を豊かにすること、これがプロシャ関税法の積極的な狙いといわざるを得ない。かかる関係をドイツ一円に拡充することがプロシャにより考えられていたのである。そして一八一九年から一八二八年までの間にプロシャは九の領邦を自己の関税圏に合併することに成功した。しかしそれらはいずれも弱小の領邦であり、プロシャの努力はこの間に大きな成果を挙げることができなかった。むしろプロシャの働きかけは大きな反感さえかってしまった。それはまた農業の偏重に対する反発でもあったのである。

プロシャの動きに対し中央ドイツ、南ドイツの諸領邦が合同した。そしてプロシャに対抗する勢力になった。とくに南ドイツ関税同盟は強力である。南ドイツでは織物を中心に早くから工業の展開がみられた。イギリスの技術を導入し、近代的な発展が当時その緒についたばかりである。そうした幼稚産業の保護ということでプロシャの仕方は納得できない。しかし一八三四年にはこれら三者の間の合同がなり、ここにドイツ関税同盟の成立の運びとなった。南ドイツの工業者が求めたのは保護である。そして関税同盟に強力な保護措置を期待した。しかしプロシャは一八一八年に規定した税率を持出し、自己の利益を関税同盟により貫徹しようとしたのであった。いわば関税同盟により全ドイツ的な規模でイギリス工業製品のための市場ができあがったといえる。プロシャの農業者はこれに大きな利益を感じた。しかもこうした利益はその後いよいよ前面に打出されていった。工業者は保護を主張したが、結局のところ無駄で、十九世紀の中葉まで税率は下向の傾向さえ示しているのであった。

ドイツで国家の形成が考えられた時、それは実現の困難な目標であった。一歩でもそれに近づくべく経済的統一ということが企図された。経済的統一を実現し、そうした上で政治的統一をはかろうというのである。しかもこうした努力は近代的な生産組織をドイツに導入することを理想とした。現実はどうであったか。それとは逆の作用をしてしまった。近代国家で工業は立国の基礎とならなければならない。しかし思わぬ結果になってしまった。農業的な利益に基盤を置いた国家というものの誕生につながる発展をたどったのである。保守的な国家の出現であった。ドイツ市場はイギリス製品の氾濫するところとなった。これはプロシャの指導の下で起こった結果である。もちろんプロシャにしても農業者の立場だけ考えたのではない。新技術の導入に懸命であった。そしてまた現に原料の輸入については、大いに考えていた。しかしそれが政府の政策の決定の場で大きな意味を持たなかったというだけのことであった。

統一前のドイツはこうしてプロシャの利益を中心に動いていた。プロシャは自己の利益を他の領邦の犠牲の上に獲得した。プロシャの利益はユンカーの利益でもある。具体的には穀物をイギリスに輸出することで実現される利益であった。これと関連しハンザ諸都市の海運業者は大きな利益を得ることができた。またイギリス製品の輸入を扱う貿易商人の得た利潤も巨大である。これら両部門が主にユンカーの掌握するところであったことは論ずるまでもない。一般に流通過程による蓄積であろうが、かなり目立つ。結局これも農業の利益実現ということのために必然化されたものでしかない。どうやらこのへんにドイツでは国家形成の基礎があったのである。ユンカーは関税同盟を介することでかかる基礎の構築に威力を発揮した。関税収益は規定に従い、人口による配分であった。当時プロシャは最大の人口を擁していた。もはや富の帰趨は明白なところである。プロシャは富裕を誇った。そしてこのことがやがてプロシャを中心にドイツが統一される原因ともなったのであった。一八四五年だが、関税収益のうち、六五パーセントは植民地産品に対する課税によった。三〇パーセントを工場製品から得た。そして農業関係の場合は五パーセントという割合である。工業部門でドイツは対外依存を深めていった。これに反し農業はいよいよ強化された。ドイツが統一国家になった時、農業がその基礎にあり、従って農業者の立

場を無視することができない。こうした点を考え、いかにして近代国家を組織し、発展させたらいいのか。ここに統一ドイツの宿題があったのである。そしてこれはまた、自力の工業を持たなければという焦慮にも通じた。

〔外国資本とドイツ〕　イギリスは繊維工業の成果を引っさげ、ドイツ市場と対することになった。当時ドイツの繊維産業は農村の家内工業として、ドイツ全土に拡散していた。今や有力な競争者を前に窒息してしまいそうである。とくに紡績部門の受けた打撃は大きく、保護を願う声もそれだけ高かった。関税同盟はこうした状況を察知した。一八五五年だが、亜麻、紡糸、紡毛、麻糸に対し、税率をそれぞれ一・三パーセント、一〇・七パーセント、〇・七パーセント、三・五パーセントと規定している。その限り保護は単に名目的なものにとどまった。プロシャは自己の利益のためドイツ繊維部門をイギリスの競争にさらすことも辞さなかったのである。在来のものは全面的な後退をよぎなくされた。副業を奪われた時、農村の大衆は困窮に追込まれる。しかし都市人口は安価な衣料に賛成であった。こうしたなかにも繊維工業に特化する地帯が出現したことは注目に値する。実にそれを指導したのは外国資本であった。職長はイギリス人。もはや繊維部門で自主的展開を期すどころではない。繊維生産は工業の重要な部門であるが、今やドイツでそれが外国資本に牛耳られてしまった。

これに対し石炭や鉄はどうであったか。保護は次第に強化された。一八五五年についていえば、それぞれ一二・五パーセント、一八・五パーセントである。鉄製品に対する課税はもっと高率であった。レール四八パーセント、棒鉄五八パーセントといった工合である。重工業部門ということだが、保護は徹底され、その効果を無視するわけにはいかない。加えてドイツは鉱産資源に恵まれていた。一方において需要の増大には顕著なものがあった。こうしたなかで生産量を引上げようという意欲も高まって来た。関税同盟の措置はその助長に役立った。鉄生産についてだが、一八三七年から一八四二年の間には、年産一〇万トンがせいぜいというところだが、一八六〇年にいたる間では、年五〇万トンに上昇している。一八六六年には一〇〇万トンに達した。そして一八七〇年までには一七五万トンに増加している。その後も急速に伸長し、一九〇三年にいたりドイツの鉄鋼生産はイギリスの水準に到達した。この発展はコークス炉の普及により達せられた。一八三七年には圧倒的部分で燃料に薪を使用している。しかし一八五二年には三分の二がコークス炉に変じた。一八六二年ともなれば、その割合は全体の四分の三に達する。一八七〇年にはもはや旧式の方法をみることができない。生産技術の質的転換のなかでドイツの鉄鋼生産は注目すべき進歩をとげた。しかしドイツで炭坑業ほど重要なものはない。出炭量についてみよう。プロシャの産出量は一八二五年に一一〇万トン。それが一八六五年には一九〇万トンに達す。ドイツ全土についてみれば、一八六五年には二、五〇〇万トンで、これはイギリスに次いで世界第二位の出炭量。一八五〇年以降において増加の割合はとりわけ顕著であった。一八四〇年代にドイツの出炭量は一、一〇〇万トン、一八五七年には一、四〇〇万トン、一八六六年には二、一六〇万トン、そして一八七一年には三、〇〇〇万トンに達した。この段階になると、国内需要を満たすだけではない。輸出に向けられる部分も相当のものであった。フランスの鉄鋼業はドイツの石炭に依存していた。一八四八年に輸出量は三八万トンに達し、イギリスの対フランス輸出の脅威となったほどである。一八六二年にはドイツの石炭輸出量が二五〇万トンに上昇している。輸入は二五万トンと大幅に減少した。単にこれは石炭資源が豊富なため可能となったのではない。むしろ炭坑に蒸気機関を導入することにより達成されたのであった。いわば機械力の利用であろうが、これにより深く掘下げることが容易になった時、ドイツ石炭業は輸出市場のための出炭に傾斜するという色彩を濃くしたのであった。一七八八年に採掘のため最初の機械力が導入されたが、進歩はかなり急速というほかない。しかしもっと重大なことは、これらいわゆる重工業部門においても、生産のため、外国資本によっていたという事実である。現に一八五七年には一億マルクに達する利子支払をよぎなくされていた。債権国としてイギリスは絶対の力を振った。ユンカーは穀物を輸出し、同時にイギリス製品の輸入商として致富に成功したが、その力を自発的に生産過程に投ずるということはない。ドイツ的富が生産過程で花開くため、強力な介添を必要とした。ユンカー指導下のドイツの場合、それは外国資本であった。